

国語

【解答】

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
b	d	c	b	b
問 6	問 7	問 8	問 9	問 10
e	c	e	e	d
問 11	問 12	問 13	問 14	問 15
b	b	d	c	c
問 16	問 17			
d	b			
問 18	スミスは、一国の富の真の創造者を、産業資本主義のもとで汗水たらして労働する人間に見いだした。			

【学習アドバイス】

本学の入試は、例年、選択科目の中から2科目を選択して受験する形式を採り、試験時間は2科目合わせて100分である。各科目にかけるバランスにもよるが、平均的には1科目50分程度が解答時間となる。2018年度まで、現代文の大問が2題だったが、2019年度以降は現代文の大問1題のみに変わった。課題文の文字数は、2019年度【約6600字】→2020年度【約4400字】→2021年度【約6000字】→2022年度【約4200字】→2023年度【約5800字】→今年度【約3200字】と、年度によってばらつきがある。一方、総設問数は、2019年度以降は18問で、今年度も18問。設問数からみて受験生は余裕をもって解答することができただろうが、長文を読み慣れておく必要がある。また、国語は普通、縦書きの文章なのだが、横書きの文章で出題されるので、この形式に慣れておくことも必要である。

今年度の設問形式は、例年通り5者択一の選択肢問題が17問、50字以内で説明する記述問題が1問。出題内容は、「漢字の書き取り問題」が1問、「語句の意味を問う問題」が3問、「同義語を問う問題」が2問、「対義語を問う問題」が1問、「単語、語句、文を入れる空所補充問題」が4問、「傍線部の内容・理由を問う問題」が6問、「筆者の考えを50字以内で説明させる記述問題」が1問となっている。18問の中で、「漢字の書き取り問題」の1問、「語句の意味を問う問題」が3問、「同義語を問う問題」の2問、「対義語を問う問題」の1問、計7問が語彙力で決まる問題である。「同義語を問う問題」のうち1問が、適切でないものを選ばせる問題であったので、解答時に注意する必要がある。昨年度は適切でないものを選ぶ問題が7問出題されている。以上の分析をふまえ、以下では3点に絞って具体的な学習アドバイスを示しておきたい。

第一は「語彙力」の増強。具体的な対策は以下の3つ。1) 学校の教科書にのっている文章、問題集にのっている文章の中の「意味がわからない語句」をチェックし、辞書で調べ、その意味を自分オリジナルの「語彙ノート」をつくって書き貯めていくこと。「語彙ノート」に「知識」が貯まっていくのを見れば自信もついてくる。2) 国語便覧や現代文用語集のようなサブテキストの中で「同義語」「対義語」「慣用句」「四字熟語」「評論用語」などのページに繰り返し目を通すこと。さらに、上記の「語彙ノート」に例文を書き写すようにすれば「文脈の推理力UP」にもつながり一石二鳥である。3) 漢字に関しても、今年度は1問しか出題されなかったとはいえ、10問ほど出題された年度もあったので問題集を1冊は仕上げておきたい。また、ここでも「意味がわからない語句」が出てきたら、意味を調べて、「語彙ノート」に加えておくこと。

第二は「長文読解力」の養成。今年度は、岩井克人『二十一世紀の資本主義論』からの出題である。本文内容は多岐にわたるが、例年、本格的な硬質の評論文ではなく、平易な表現で書かれた評論あるいは随筆（エッセイ）であり、高校生にも読みやすい文章が出題される。とはいえ、練習は必要である。具体的な対策は以下の2つ。1) 標準的な問題集を用いて、さまざまなテーマの長文を読むことに慣れておくこと。2) 本文の内容を正確に読み取るために、一文の組み立て、段落の組み立て、本文全体の組み立てなどを意識しながら本文を読むこと。

第三は「文脈把握力」と「論述力」のUP。多くの問題は「空欄や傍線部前後の文脈の把握力」で決まる設問であり、毎年1問出題される50字以内で説明する記述問題は「設問で問われたことを本文から的確に読み取り、正しい日本語で文章化する力」で決まる設問である。具体的な対策は以下の2つ。1) 空欄や傍線部前後の「言い換え」「対比」「因果関係」などを読み取る練習をすること。2) 30字～60字程度の解答字数の記述問題を集中的に演習すること。1)、2)を両方満たすためには、本学の過去の入試問題を解くのはもちろん、記述問題中心の問題集を1～2冊こなすことも必要である。